

靈主體從の食物

大本式食事にうつらんとする人々へ注意

若 月 滿 太 郎

眞箇の大本式食事は人間の肉體を淨化し、それを無病壯健にするものであるけれども、單に植物性食品であれば何でも好いと云ふやうな淺薄な似非大本式食事は時として人々を營養不良とし、疾患の素因を醸成するに至るやも計りがたいのである。穀菜食を主とする

大本式食事の好參考としては、食養界の先覺者石塚左玄氏を引合に出さなければならぬ、氏の食療法は一種の食物の陰陽哲學とも云ふべきものであつて、これが研究を重ねて行くと皇道大本の主張せる『靈主體從』なる惟神の原則を側面より實驗せるものとしてみななく興味深きものたるを知るのである。

石塚氏は食物の陰陽の對立を稱して『鹽鹽』又は『夫婦亞爾加里』と稱してゐるのである。夫婦亞爾加里の中、陽性に屬するものを那篤倫鹽と云ひ、陰性に屬するものを加里鹽と云ふのである。陽性に屬する那篤倫類は俗に鹹氣と稱するものであつて酸化作用の抑壓者で、又保温作用を營み、凝縮硬化の兩作用を有し、概ね煮て凝

縮する食品類之れである。而して又陰性に屬する加里鹽類は俗に苛氣と稱するものこれであつて、酸化作用の主働者であつて、又體温放散の作用を司り、軟化膨大、即ち崩解力と吸水作用を有し、多くは煮て膨大するものなのである。

食物に陰陽兩性あることに就ては皇道大本の教義を聽いたことのあるものにはその然るを到底疑ふことは出来ぬのである。何故なら万有陰陽をなはれるは、天之御中主神より高御産巢日、神御産巢日、の兩神の分化し給うた時からの宇宙の根本設計であるからである。余は大本に於て原子、電子にまで陰陽兩性あることを聽かされたことがある、然らば如何にして此等の日々攝取する食物にも陰陽の對立なしと云ひ得ようぞ。陰陽の對立はやがて、體系靈系の對立を意味するのである。石塚氏の陽性に屬する那篤倫類を酸化作用の抑壓者で、又保温作用を營み、凝縮硬化の兩作用を有するとしたのは全く炯眼だと稱せざるを得ぬのである。

抑々ものが陽性であるに云ふことは、靈系に屬してゐると云ふことを意味するのである。「靈」は「體」にやきつてはじめてその活用を充つるのであるが、「體」は体そのものだけでは、加里鹽類と等しく酸化分散、体温放散、崩壊及び水分吸収の作用を營んで、決して一箇の人格者たる筒体を形造ることが出来ないのは、靈魂が脱出した後の肉体が酸化分解崩壊しなつて筒體の原形をきとめ得ないのでも明瞭なのである。筒体が筒體たる一定形を固守し一定の体温を保有し得るのは「體」に加ふるに「靈」をもつてしてゐるからであるのである。大本では靈の中にも又「靈系と體系」とがあり、體の中にも又「靈系と體系」とがあるを稱へてゐるが、體は總括して云へば分解崩壞體温放散の消極的性質を有つのであるけれども「體」の中でも靈系（即ち陽性）のものは分解作用を抑壓し保温作用を營み凝縮硬化の靈系者的作用をもつことは争はれないのである。

宇宙は積極と消極と、生と滅と、分解と凝縮との交互的發展で成立つのであつて茲に新陳代謝の理法が儼然としてその存在を主張してゐるのである。吾々の肉體を構成する各細胞も舊細胞の死滅崩壊と、新細胞の構成凝縮とによつて新陳代謝がいとも巧みに行はれてゐる。この新陳代謝の機能が行はれなくなつたら吾々の肉體は死滅するより途はないのである。それ故大本靈學より考ふるも、吾々は分解を司る体系食物（即ち陰性食物）と、凝集を司る靈系食物（即

ち陽性食物）とを相交へて適當に食すると云ふことが必要なのである。若しその相交ふる分量が適當を失した時には、その肉體の新陳代謝機能に變調を起して疾患の原因となるを保し難いのである。

陰陽兩性の食物又は靈體兩系の食物の攝取は如何なる分量が適當であるかを説述するに先立つて、大本神諭の偏した讀み方をしてゐる諸君のために少しく辯明の勞をこつても好いと思ふ。それは「お土の御恩を知れ」と云ふ神諭の言葉と「大根の株でも赤葉でも常から大切にせよ」と云ふ神諭の言葉とである。この言葉は無論大根の株と赤葉ばかりを食べよと云ふ意味でないのであつて、大根の株でも常から大切ににして、苟もかりそめにすなと云ふ意味である事、明かである。天地の御恩を知ると云ふことは自然の與ふるものを公平に攝り用ゐよと云ふ意味であつて、偏して攝れよと云ふ意味ではなさうである。「お土から上りたものであれば何を食べても生命はつなげるから」と云ふ神諭もイザと云ふときに與へられる應念の神力であつて、平常は陰陽兩系の食物を適度に攝り用ゐることによつて吾々の健康が保持せられ、吾々の健やかさが進めらるべき道理である。茲にこれ等を實證する一二の實例を引いて説明して見たいと思ふ。

これは現在修齋會の京都支部長をしてゐられる榎本信守氏實母姦しげ子刀自から聽かされた實話である。同女がまだ若い時修業のた

めに大阪のある家に奉公をしてゐた時に、その家の奥様と云ふのが甚だ天地の御恩を知らずお土から上りたものを大切にしない女であつたが、恰も夏の眞さかりで、朝煮たものがその夕方には稍とすゑてゐると云ふやうな頃、御飯の食へのこりがお櫃の中で汗ばんでゐるに必ずそれを便所に捨てさせたものである。下女があんまり勿体ないと思つて當惑した顔をしてゐると奥さんは自分は眞理を掴んでゐると云ふやうな顔付をして「腐つた御飯を食へたつてそれは決して滋養にならない、それは腹の中を通つて便所へ落ちて行くばかりだ。それに腐つた御飯を食へれば或は中毒するかも知れない。一層腹をこぼさずに直接使所へ捨てた方が衛生になつてゐるではないか」と云ふのが常であつたさうだ。もし人間の學識をもつてするならば、これらは眞理を道破し得た至言であるかも知れない、しかしながら様様の智慧は又別物であると思つて、その頂様と云ふ女はまもなく兩眼とも盲になつて了つたのである。

以上はお土から上りたものを粗末にした自業自得の結果であるが茲にはお土から上つたものを大切に授けられた神徳の實例があるのである。神戸の大本神者西本善太郎君は參禪して自然の吾人に與ふるものは米粒、つだに粗末にすべからざることを知り、それ以來、自分の子息に途上一粒たりとも穀類が地に落ちてゐるのを發見したらば必ず拾ひ歸つて來ることを命じ、それが十粒に達すれば

靈主體從の食物

一錢を賞金として與ふることにしたのである。金錢その他の貴重なる財物はたとひ路上に落とされてゐても何人か拾ひ取つて利用するであらうけれども一粒二粒の穀粒の如きは何人もこれを拾ひとることなく、精巧なる自然の力徳、神の恩寵は何人にも顧みられず、蹂躪られて地に委し終るこゝが誠に勿體なく感ぜられたからであつた。間もなくこのかくれたる自然の恵みに對する敬虔な行爲はあらはに報ひられたのであつた。これも時あたかも盛夏のことであつたがその隣家では今朝焚いた飯がその夕方に汗ばんでゐると云つて零してゐるのである。しかるに氏の宅では一度に三日分の飯を煮いて置くのに三日の終りになつても腐敗しかりもしないのである。隣家の人は不思議がつて、さう云ふ焚き方をなさるんですかと訊くから「瓦斯で焚きます」と答へたさうである。瓦斯の火で焚いた飯は味も不味く腐敗し易いのが通例であるのに何と云ふ不思議なこともあるだらうと、人々あまりに不思議がるので、西本君もはじめにその神祕に氣づかせていたゞいて、試みに七日分の飯を一度に炊いて見たが、七日目の終りになつても、温度九十度を越してゐる夏のさかりにすこしの腐敗の兆候も見られなかつたさうである。

第一例は、自然の恩恵を輕視した報償の實例であり、第二例は天地の御恩を假初にも忽諾にしなかつたことに對する神徳の實例であるが、たゞ無暗に天地の御恩を有難がるばかりで、神か何故天地の

萬象を陰陽又は靈體二系に御苦勞にも分化して下すつたかその所以をもささらず、従つて本當の意味に於て天地の御恩を理解し得ず、体系の食物即ち陰陽の食物ばかり偏食して疾病を醸すに到つた實例を左に掲げて、本當の天地の御恩を知ると云ふことの奈何なる意味あるかを余は讀者と共に知りたいと思ふのである。

大杉久子女史(故意に假名を用ふ)は本來鹹味のものを好まづして鹹氣うすきもの、果物、酢の物なき極めて淡泊なるものが好きであつたが、在來社會の人であつた時には肉類西洋料理なきをも交へて食べてゐたため、分散膨大の傾向ある陰性体系の食物と凝縮固成の作用ある陽性靈系の食物との調和が稍々とれてゐたために瘦せてはゐたけれども健康を維持してゐた。ところが大本信者になつて綾部に移住して來てからは在來の獸肉類をたなくなつたにもかゝらず、依然として鹹氣うすき植物性食物を嗜食してゐたのである。植物性食物は多くは形の上からは縦(陽性)であるが、作用の上からは分散膨大の傾向ある体系陰性のものであるから、女史の健康は一層改善されたやうに見え、その肉体は次第に肥胖膨大して來たが髪の毛は何だか脱けることが多くなり、この春流行性感冒にかされると共に、心臓の疾患を併發することになつたのである。動物は外姿は横に動くものであるから形の上から云へば横(陰性)であるが、食物としての作用の上から云へば凝縮固成の傾向ある

靈系陽性の食物である。従つて在來大本信者たる以前にこの凝縮固成の傾向ある肉類を攝取して食餌の平均を得てゐた人が、大本信者となりし爲に肉類を攝取し難くなつて、主として副食物に菜食をどうやうになつたならば、凝縮固成の作用を、代補するところの鹽氣を多量にとるを要するのである、

大杉史女の例なきを以て見るに大本の信仰に入りしために食餌の不均を來して疾患を招來する一原因を作つたのであるから誠に氣の毒である云へば、氣の毒であるが、これも神徳と云へば神徳である。所謂世間並の人間から大本信者になつる人々は概ね世間並の肉食過多の食事から大本式の穀菜食に急激に轉ずるのであるから、疾患を醸さないまでも、鹹氣不足の蒼味を帯びた容色に陥るのが普通であつて、栗原白嶺氏なども參綾當時大本の人達は皆營養不良の顔色をしてゐると評した位であつた。それがさう云ふ理由だから余なきは判らなかつたのであるが女史が疾患を得たのを目撃してからその疾患の原因が凝縮固成の作用を有する鹽氣を淡くして野菜を以つたためであると云ふことをわからせて頂いたのである。それと同時に今後世間並の肉食過多の食事から、大本式穀菜食に急激に轉ずる人のために前車の覆轍として後車に警戒を與へることが出來たはずれば病苦はたさひ堪へがたかつたにしてもまた誠に有り難い神徳だとも考へさしても頂けよう。

却説、鹽氣の食物は凝縮固成の靈的作用を有し、苛氣の食物は分解離散の體的作用を營むのであるから、この兩者の適度に交へて食することには仍つて吾人の生理作用、新陳代謝機能は旺盛なること云ふことは前述した通りであるが、如何なる程度に吾人はこの兩者を混合すべきであらうか。

これも吾人の見地からすれば大本の夙に唱道せる養生體從の原則に則つて兩者を混合すれば好いのである。體的に物質を凝縮固成するところの鹹氣を勝たして食餌をとるならば植物性食物で養はれてゐる吾々は概ね食物の調和を得て、健康を保持し得るのである。統計學者の説によれば、その國の文化程度は砂糖の消費量の多寡によつて知り得る、すなはち砂糖の消費量たかき程文明なりとじてゐるのである。砂糖は陰性即ち体系の極度であつて分解散失の作用強きものであること云ふことは、餅に砂糖を入れてかきもちとして焼いて見ればその甚だしく膨大することに仍つても知り得るのである。是に由つて是を觀れば砂糖の消費量たかければ高き程、その國民の食物の選擇が体系陰性のものに傾いてゐる即ち体系從に傾いてゐること云ふことを示してゐるのである。かゝる見地よりするならば砂糖の消費量の高低によつてはからるる所謂「文明」の標準なるものは實は体系從の標準を示すものであることを知り得るのである。

大本式食養眼よりするならば寧ろ食鹽の消費量の多寡によつて眞

養生體從の食物

文明即ち養生體從の文明の程度をはかる方が稍正鵠に近いのである。耶蘇の言葉に「爾曹は地の鹽なり、塩もしその味を失なはば何の價値あらんや」と。鹽氣は分解腐敗を防ぐ靈系陽性のものであることは繰返し述べたところであるが實際鹽氣強く煮たものは決して腐敗すること云ふことはないのである、吾人の肉體も稍々鹽氣強ければ強壯であつて却々病魔に犯されること云ふことはないのである。食餌上の養生體從は生硬な語ではあるが、鹹主苛從と云ふ語で表現はしたら一層適當であるかも知れないのである。(成分の秤量的分量によつて鹹主苛從と云ふにあらす、作用の均衡上かく云ふのであつて、鹹味品の程度を超えてはならないのである。)

形の上から云へば植物は縦に生育し、動物は横に運動するのである。即ち植物は縦(一)動物は横(二)であつて、植物動物兩者を相交へて食して一合して十字架の形となるのである。石塚氏は植物性食物と動物性食物とを如何なる割合にて攝取するが好いかと云ふことに就て、人間の齒の構造より立論して穀食七割、肉食二割、肉食一割を稍鹹くして食するをもつて理想的であるとしてゐる。「食は本也、心は末也、病は其末也。」と云ふ石塚左玄氏の絶叫は幾分吾々の精神作用をもつて食物(物質)より發せる化學作用であるとする淺近な近人唯物主義の發露と見られないこともない。併しながら氏の化學的食養論を近代のフレノロヂーに聯關して考ふる時

なか／＼打勝ち難き眞理を蔵してゐることを知ることが出来るのである。植物性食物を多食する牛馬の類は顔面長くのんびりしてよく戸外の激しき勞働に耐へ得るのである。即植物は形の上より云へば長く伸び、作用の上より云へば概ね煮て外膨脹するものであるからである。吾々も植物性食品に適當の鹽味品を加へて食餌をこれば、溫和なる顔容と、外に出で、活潑に活動し得る精力とを與へらるゝのである。これに反して主として動物性食品を嗜食する猫の如きは顔面短く額も亦猫額大にして氣品少く、晝間は懶惰の氣起りて頻りに眼を貪り夜間却つてこそ／＼とほたらくのである。これ形の上より云へば動物は横に動くものなるをものて、これを食ふものは顔面横に平たく縦に短くなるからであり、作用の上より云へば動物性食品は概ね煮て凝縮するものなるをもつて、これを食ふものは多くは内に閑居して不善を犯すに致るのである。近代文明社會の美人概ね丸ぼちやにして内に閑居して不善を行ふもの多きは一面より云へばたしかに動物性食品を過多に攝るに到つたからだ云はなければならぬのである。

大本の主張する所によれば宇宙間ただ一つの偶然もないのである。吾々の有意的になされたる行爲と、無意識機械的に果されたる出來事とに論なく、常に一種の宇宙的宿命に操られてゐる。余は嘗てある某會社の技工として機械据付中誤つてタガネにて削りこつたる

金厨片にて前齒を打ちつけ、上前齒の古側の一枚に充填しありし齦齒かころりと脱け落ちた經驗をもつてゐる、するに間もなく余の社會的生活に破綻を來してその會社を退くの己むなきに到つたのであつた。その後發續して一日大上の宿舍に修業者と共に雜談してゐると、そこに修業者の中に齒の形と位置のみによつてその人の運命を占ふと云ふ觀相家があつて、右側の齒は社會的生涯を左側の齒は家庭的生涯をあらはすのであつて、三十數枚の齒各々その形と位置に従つてそれ／＼意味があるのだと云ふことを聞いた。余が非世間的人間であつて永久に社會的生涯に於て圓滿を缺くのは右側の齒の不揃ひだけにすらあらはれてゐたのである。不揃ひの上に余は小學兒童たりしとき偶然の出來事から右側の門齒を一枚を折つたのであるがそれを充填せる義齒の破壊と共に某社を退くに到つたことなき考へ合して見るに、吾々から偶然視されてゐる出來事も、宇宙的宿命より觀れば決して偶然ではなく一種の宿命と計畫によつて操られてゐることを考へさしていたゞいたものである。

齒は運命の象徴として斯くの如く興味深きものであるのだが、齒ならば、又は各々の齒の形すら食物の種類によつて變化するのであつて、最近の小學兒童は大ていその門齒の先端が、犬齒同様に尖がつてゐること殆んど肉食動物に類似してゐるのである。これ等はその父母なる人の肉食を多くし、兒童も亦その化骨期に肉食を多くし

た結果であらうと思はれる。大本神諭に「日本の人民皆四つ足になりてゐるぞよ」とあのを拜誦してまことに國祖の御愛慮の程拜察するだに恐懼の感を起さずにはゐられないのである。

人類の容貌が齒の形に到るまで肉食獸的になつて來ると、(それ等は人の運命の象徴であるから、)人類の運命も亦肉食獸的にならざるを得ぬのである。乃ち弱肉強食をもつて自然の意志なりとして毫も疑はず「民は民と戦ひ、國は國と争ふ」と云ふ世の終末の現狀を招致するに到つたのである。

かくの如く人類の運命の象徴としての相貌が次第に肉食化しつつあるのは、彼等が肉類を多量に啖食するに到つたからではあるが、人類全般の食欲嗜好が肉食に傾き來つたと云ふことも亦偶然ではないのである。何故なら神の許しなくしては一枚の木の葉すら地に落ちると云ふことはないからである。それは耶穌も釋迦も豫言したところの「世の終末」の前兆として、來るべき管のものが來たのである。しかし又彌勒の世の先驅者として彌勒の世のやり方を爲す所の人達も亦現はるべくして現はれなければならぬ、それは營養物の攝取の側から觀れば大本式に植物性食品を啖食する人達の出現である。しかしながら終りにのぞみ余は繰返し云つて置かなければならぬ。それは大本式植物性食餌に移る人は幾分以前の嗜好よりも鹽辛くして食するやうにしないといふ食物上の靈主体従は得られない。

靈主体従の食物

云ふことである。

獻金及普及會費は是れまで神靈界附録として取纏め發表致居候處今後獻金者へ一定の書式に依り領收の通知書を差出す事と相改め候に付獻金及普及會費は一般へ發表せぬ事と致候間右御承知下され度候

敬具

大正十年五月

大日本修齋會

財務局

追て領收通知書不着其他金錢上の事に付御用有之候はゞ財務局長宛親展にて御申聞被下度候